

「アラブ人名の由来と正しい呼び方」

日本貿易振興機構(ジェトロ) リヤド事務所 編

※ **本資料のご利用にあたって**

本資料はアラビア語からの仮訳の部分を含みます。ジェトロでは情報・データ・解釈等をできる限り正確に記すよう努力しておりますが、本資料で提供した情報等の正確性についてジェトロが保証するものではないことを予めご了承下さい。

アラブ人名の由来と正しい呼び方 - (参考: 称号・敬称の用い方)

著: 宮崎和作氏
(財)中東協力センター
刊行物より抜粋・転載

はじめに

『ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い』という川柳があるのをご存じでしょうか。その昔、日本のインテリ層の間でドイツ名やドイツ語単語の珍妙な読み方が幅を利かせていた頃、かの有名な詩人で劇作家ゲーテ(Goethe、より正しくは von Goethe)のことをなぜか「ギョエテ」と呼んだことを揶揄した狂句です。そんな冗談話ばかりでなく、1970年代初期、時のニクソン大統領とともにウォーターゲート疑惑に関係して辞任させられた側近のひとり、ジョン・アーリックマン(John Erlichman)特別補佐官の場合も、ドイツ系とはいえれっきとした米国人であるにもかかわらず、どうした理由からか日本のマスコミに登場する評論家の多くが「エールリッヒマン」というドイツ語読みで呼んでいました。

同じような例は国際的(?)にも枚挙にいとまがありません。今や世界的に高名なプロ・ゴルファーの青木功(Isao Aoki)さんがまだそれ程広く知られていなかった頃に米国でプレーしていて、テレビのキャスターが青木さんの名前を典型的米国流(?)に発音し「アイセイオー・エイオウカイ」と紹介したのだから、周りの人はもちろん本人にも誰のことか全く分からなかったという、これは嘘のような本当の話です。また、サウディアラビアのある町の看板に“Al-Baker”(「アル・バクル」あるいは「アル・バーケル」などと発音するのが正しい。)とあったのを、英語風に「アル・ベーカー」と読んでいてさっぱり通じなかったという日本人ビジネスマンの話もありました。

要はこれらの話はすべて、呼び手なり読み手なりの方が、自分の母国語や特定の外国語に知らず知らず囚われていたために起きたことではないでしょうか。世界のいろんな言葉の構造や発音、表現様式はいつてみればそれぞれの国や言語の歴史の所産であり、土着の文化の集大成です。そして、人名や地名は文化そのものというべきでしょう。従って、相手方の名前のよって来たところに十分な思いを致すことなく、自分側の勝手な思い込みや生半可な知識だけで人の名を外国式に呼んだりするのは、単なる間違いとか無神経、軽率だけで済ませてよいことでは到底ありません。それは相手の文化を軽んじ、あるいは馬鹿にしているものと受け取られても抗弁のしようがないことであり、そんなことで相手方とのコミュニケーションがうまく行くわけはありません。

サウディアラビアのナーゼル前石油相がかつて指摘したように、日本とアラビア湾岸の国々とはいわば「レシプロカル・セキュリティー」(経済的補完関係の強化を通じた経済相互安全保障)の関係にあります。このような経済的関係をさらに文化、教育、先端技術開発の面にまで広げ、高めて行くことが求められている中で、われわれ日本人がアラビア湾岸地域の人々の名前の由来や背景をよく理解し、また正しい呼び方を身につけることは、お互いの間の意志の疎通と相互理解をより深めて行くために極めて重要なことでありましょう。

I. アラブ人名の由来

(1) アラブの名前

アラブ人の男性の名前は通常単一の語から成るか、2語あるいは3語が繋がってできた名前のいずれかです。女性名の場合は、ごく少ない例外を除いてほぼ単一の語から成っています。

(例)

単一語の名前	2語から成る名前	3語からなる名前
Muhammad	Abdullah (Abd Allah)	Abdulaziz (Abd al-Aziz)
Ahmad	Al-Jabir (Al-Jabir)	Abdulkareem (Abd al-Kareem)
Ali	Alireza (Ali Redha)	Muhiddin (Muhyi al-Din)
Sultan	Boumedienne (Abu Medien)	Aladdin (Ala al-Din, アラジン)

(2) アラブ人名の構成…本人名と父祖名の列記

アラブ世界の人々の名前には元来は「姓」というものがなく、本人名の後に父名、祖父名を列記するのが基本です。これは男女ともに共通しています。

(例)

本人名	父名	祖父名
Muhammad	Abdulaziz	Hussain
Mariam	Abdullah	Abdalmohsen

父名、祖父名の前にそれぞれ「息子」を意味する bin、ibn あるいは ben などを入れて親子関係を表すことがあります。特にサウディアラビアの王族、アラブ首長国連邦(UAE)各首長国の首長一族などの場合はそれが常となっていますが、クウェイト首長一族の場合は、bin、ibn の代わりに定冠詞の“al”を使うのが常識です。民間人の場合にこのような表記法が使われる例はそれ程多くないようです。

(例)

本人名	父名	祖父名
Fahd	Ibn Abdulaziz	Ibn Abdulrahman(サウディアラビア国王)
Zayed	Bin Sultan	Bin Zayed(アブダビ首長)
Jabir	Al-Ahmad	Al-Jabir(クウェイト首長)

女性の名前の場合は、本人名と父名の間に「娘」を意味する bint を入れて親子関係を表します。この場合も王族、首長一族に対してはこのような表記がしばしば使われますが、民間人の女性について使われている例にお目にかかることはまずありません。

(例)

本人名	父名	祖父名
Jauhara	Bint Musaid	Bin Jiluwi(故カーリド国王母君)
Hassa	Bint Ahmad	Al-Sudairi (ファハド国王母君)

なお、アラブ人の名前には元来「姓」がなく、その構成が基本的に本人名、父名、祖父名から成るものである以上、女性が結婚しても名前が変わることはありません。従って、いわゆるラスト・ネーム(後で述べる部族名、氏族名や家名など)が夫婦の間で異なるのはいってみれば当然の事です。

ところでサウディアラビア外相のサウド殿下の名前について、他の王族のそれとは少々異なった表記方法が使われていることにお気づきになっていませんか。即ち、同外相の名前の父名の表記が“Bin Faisal”でも“Ibn Faisal”でもなく、“Al-Faisal”とされることが近年非常に多くなっています。これは同外相をはじめ故ファイサル第3代国王直系の王子については ibn や bin を使うことをせず、「かの名君の故ファイサル王の子息」であることを特定するために、定冠詞“al”を使用するのが常となって来ているからです。

(例)

本人名	父名	
Abdullah	Al-Faisal	(ファイサル国王財団理事長)
Saud	Al-Faisal	(サウディアラビア外相)

本人名、父名、祖父名を列挙するのがアラブ人名構成の基本であるとはいっても、それでは何とも長くなり過ぎるということで、日常の用に際しては祖父名を省略することがよく行われます。また祖父が著名人である場合には、祖父名を残し父名を略すこともあります。

(3) 部族名、氏族名

部族制であるアラブ社会では、部族名やそれから派生した氏族名に定冠詞“al”をつけて父祖名

の後におき、出身部氏族を明らかにすることがしばしば行われます。とくに大部族や名門氏族の出であることを示す場合に多く使われます。

(例)

本人名	父名	祖父名	部氏族名
Maktoum	Bin Rashid	Bin Said	Al-Maktoum (ドバイ首長)
Sabah	Al- Ahmad	Al-Jabir	Al-Sabah (クウェイト第一副首相兼外相)
Saud	Al- Faisal		Al-Saud (サウディアラビア外相)
Abdullah	Bin Muhammad	Bin Ibrahim	Al-Shaikh (サウディアラビア司法相)
Hilal	(Al-)Mishari		Al-Mutairi (元クウェイト商工相)
Nader	(Al-)Hamad	(Al-)Sultan	Al-Issa (クウェイト石油公社副総裁)

氏族名、支部族名となると、もともとその一族の祖先の誰かのファースト・ネームであったものが時代を経る内にその氏族、支部族の名前として社会的に認知された、という場合がままあります。たとえばサウード王家はサウードという名の人物を祖とし、その人の個人名がやがて氏族名として『市民権』を得たものです。同様にクウェイトのサバーハ家、ドバイのマクトゥーム家もそれぞれサバーハ、マクトゥームという名の人物にさかのぼる家系であり、それらが氏族名となったものです。

逆にいうと、これらの氏族名は元はといえば個人名の転化したものですから、マクトゥーム、サウード、サバーハなどの名前を持つ個人がいるのも当然でしょう。氏族名、支部族名だけでなく、アブダビ首長一族の分家である「バニ・カリーファ」、「バニ・スルターン」の2つの家系の通称も上に準ずる呼び方といえます。

(4) 字名(あざな)、家名

部氏族が勢力を伸ばし、社会が大きくなって社会制度が確立するにつれ、特権階級が生まれます。社会の進化とともに出現するエリート階層の人々…支配階級、高級官僚、著名人、有識者など…はやがて、自らと一般庶民を区別するために字名(あざな)や家名を使用するようになります。

これらの字名、家名には、氏族名の場合と同様に父祖の誰かの個人名の転じたものが多いのですが、その他に祖先の出身地から来たもの、社会的に尊敬される職業に就いていた祖父の職名がそのまま家名になったもの、一家の興隆の祖の風貌、立ち居振る舞いを標榜、賛美するニックネームが字(あざ)となったものなど、実にさまざまです。とくに職業、家業から来た字名や家名の場合は、その道で財を成し、あるいは地域の商人、職人として名を成した祖先からその家系が始まったことを示しています。

(例)

本人・父名	字名・家名	字名・家名の故事来歴
Khalid Yousef	Al-Marzooq	祖先の個人名が転化したもの
Ghaith	Rashad Pharaon	祖先のニックネームが古代エジプト王の『ファラオ』
Hisham	Muhiddin Nazer	祖父が中央市場検査役(往時は公正、公明正大の象徴)
Abdulwahhab A.	Attar	祖先が香水商で名を成したものらしい
Abdulaziz M.	Tuwajiri	商人、行商人
Abdulmajid A.	Mohandis	技師、技術者
Ahmad Zaki	Al-Yamani	祖先がイエメン出身
Murad Yousef	Behbehani	祖先がベベハーン(イラン)出身
Khalid Salim	Bin Mahfooz	祖先がマハフーズ地方(南イエメン)からルブ・アル・ハリー砂漠にかけ、『砂漠のオオカミ』、『マハフーズの申し子』と畏怖された3人の豪商のひとり

(5) 宗教的意味合いを持つ名前

ムスリム(モスLEM、回教徒)のアラブ男性の名前には預言者ムハンマド(俗にいうマホメット)の名前そのもの(Muhammad)とか、預言者の子孫や係累の名前(Ali, Hussain)、アッラーの神や善を称える言葉(Ahmad, Hamad, Sultan)等々、もともと信仰や宗教と直接結びついたものが多いのですが、とくに3語から成る名前(Abdulkareem, Abdulrazzak, Abdulrahman など)がそうです。但しムスリム女性の名前については、“Fatimah”(預言者ムハンマドの娘の名)“Khadijah”(預言者ムハンマドの最初の妻)などごく少数の例外を除き、宗教に結びつく名前はあまり多くありません。

預言者ムハンマドの言行録『サヒーハ・ムスリム』に、「唯一絶対神アッラーには99の名前がある」とあります。ムスリム男性名の中で3語から成る名前では、“Abd”で始まるものの場合、Abd は『下僕』の意で、それに続く Al-Kareem(寛容なる者)、Al-Razzak(与える者)、Al-Rahman(慈悲ある者)、Al-Aziz(力ある者)等々がアッラーの神の徳性をあらわす99の名称に当たります。また同様に3語から成る名前でも Al-Din で終るものの場合、その語尾は『信仰』あるいは『信仰ある者』を意味しています。

これら3語から成る名前を文字にする際に、たとえば「アブドルアジーズ」という名を Abdul-Aziz と書くときと、Abdulaziz と一連綴りにするときがありますが、これらはどちらも正しい書き方です。またさらに、これをアラビア語の正しい発音により近くより正確に表記するために、'Abd al-'Azizと書く場合もあります。

(6) 子女名を使った呼び名

アラブの国々では結婚して男児が生まれた人に対し、生まれた子供の名前を使って、たとえば「スライマーンの父親」(“Abu-Sulaiman”)とか「サイドの母親」(“Umm-Said”)などと呼ぶことがごく日常的、一般的に行われます。これは、立派に人の親となったことへの敬意をこめた呼び方であるとともに、お互いの間の親近感を高めることにも役立ちます。この場合に使われる子供の名前は、原則的に長男のそれとされます。

(7) 複合名による呼称

エジプト、シリア、パレスチナのように何世紀にもわたってムスリムがキリスト教徒と、ユダヤ教徒など数多くの異教徒達と混じり合って住んできた社会にあっては、自分が敬虔なイスラームの徒であることを自ら明示するために、本来の自分のファースト・ネームの頭に預言者ムハンマドの名をくっつけてひとつの名とする呼び方が時に行われます。これは『複合名』と呼ばれます。

(例)

複合名	字名・家名	
Muhammad Anwar	El-Sadat	(元エジプト大統領)
Muhammad Zia	Ul-Haq	(元パキスタン大統領)
Muhammad Farouq	Al-Hussaini	(元サウディアラビア石油省経済局長)

(8) 名前を通して見る文化のつながり

名前は文化そのものであり、そしてまた、アラブの名前には宗教的意味合いを持つもの、とくにイスラームと深く関係するものが多いことにもふれました。湾岸アラブ諸国やその他のイスラームの国々の人々にそのような名前を持つ人が多いのは極めて当然のこととかなずけるのですが、それら以外にも、意外な宗教、歴史に結びついた名前がアラブ・イスラームの名の中に実に多いことに驚かされます。その一部の例として、旧約聖書や新約聖書、キリスト教の歴史でおなじみの人物の名を源とするイスラーム名をいくつかあげてみましょう。

(例)

聖書などに出てくる人物名		該当するアラブ・イスラーム名	
ガブリエル	(天使)	ジブリール	(Jibril)
マリア	(聖母)	マリアム	(Mariam)
イエズス	(キリスト)	イーサ	(Issa, Eisa)
ヨゼフ		ユーセフ	(Yousef)
アブラハム		イブラヒーム	(Ibrahim)
イサク		イスハーク	(Ishaq)

ヤコブ		ヤアクーブ	(Yacoub)
モーゼ		ムーサ	(Musa)
ダビデ		ダウード	(Dawood)
ソロモン		スライマーン	(Sulaiman)
サムエル		イスマイル	(Isimail)

一方でまたこれとは全く違った意味で、歴史的背景を持つ名前があります。主としてサウディアラビア西海岸地域に多く見られる家名で、「タシュカンディ」(Tashkandi)、「ブハーリ」(Bukhari)、「クスタンティーニ」(Kusutantini)、「トラブールシ」(Trabulsi)などがそれです。これらはそれぞれの祖先が旧ソビエト連邦・現ウズベキスタン共和国のタシュケント(Tashkent)、ブハーラ(Bukhara)、あるいは遠く東ローマ帝国やオスマン帝国の首都だったコンスタンチノーブル(Constatinople、現在のイスタンブール)、レバノンやリビアのトリポリ(Tripoli)などの出身であることを示しています。そしてこれらご先祖の人々は概ね、未だ交通手段が十分に発達していなかった数10年あるいは100年、200年昔に、遠路はるばる艱難辛苦を乗り越えてマッカ(メッカ)巡礼を果たしながら何らかの理由で再び故郷に錦を飾ることかなわず、ジェッタ近辺に住みつぐ内に幸運にも成功をおさめるに至った人たちです。これらの名前の中に、宗教を通じた異文化同士の思いがけない接点が見えて来るということです。

II. アラブ人名の正しい呼び方

(1) 本人名と部氏族名、家名の使用

アラブの人達がお互いの名前を呼び合う場合、ファースト・ネーム、つまり本人の名だけを呼び捨てにするか、または本人名を敬称、称号つきで呼ぶのが常で、これは男女ともに共通しています。本人名に続けて父名を一緒に呼ぶこともよく行われます。

(例)

人物名	通常の呼び方
Mr. Abdulrazzak M. Al-Mulla	(Mr.) Abdulazzak
Prof. Farouq H. Al-Qassim	(Professor) Farouq
Miss Ayisha Abdul-Nasser	(Miss) Ayisha
* Mrs. Mona Abdullah Al-Sirhan	(Mrs./Madam) Mona
Dr. Mohammad Said Al-Oweis	(Dr.) Muhammad Said

* 本人名 Mona の後の「Abdullah Al-Sirhan」は同夫人の父親の名前であり、ご主人の名前ではない。

上に例記した以外の呼び方、とくに部氏族名や家名に敬称をつけて呼ぶ欧米式のやり方(上の例でいうならば、Mr. Al-Mulla、Prof. Al-Qassim、Miss Abdul-Nasser 等々)は、少なくともアラブ世界の伝統的な方式としては正しい呼び方とはされません。しかしながら西欧の事情に精通し西欧流の名前の呼び方に慣れている人々や、欧米で教育を受けた人の多い石油関連コミュニティ、高級官僚などの世界ではその限りでは必ずしもなく、欧米の流儀が抵抗なく受け入れられていますし、そのようなやり方が相手に対して失礼に当たるということもないようです。

(例)

人物名	受け入れられる西欧式呼び方
Dr. Mana Said Al-Otaiba(元 UAE 石油相)	Dr.Otaiba/Dr.Al-Otaiba
Ambassador Fawzi Shobokshi(元駐日サウディ大使)	Ambassador Shobokshi
Mr. Abdullah S. Jumah(サウディアラムコ社長)	Mr.Jumah

但し、王族や首長一族の人達への呼びかけについては状況を異にします。湾岸アラブ諸国のどの国においても例外なく、王族や首長家の人々に対しては本人名に称号を冠した呼び方のみが使われます。父君の名前、祖父名を本人名に続けて一緒に呼ぶ場合もあります。

(例)

人物名		正しい呼び方
Sultan Qaboos Bin Said	(オマーン国王)	Sultan Qaboos
Shaikh Saad Al-Abdullah Al-Sabah	(クウェイト皇太子)	Shaikh Saad(Al-Abdullah)
Prince Muhammad Bin Fahd Bin Abdulaziz	(サウディアラビア東部州知事)	Prince Muhammad(Bin Fahd)

(2) 本人名と父祖名の混同

日本や西欧社会で最も広くかつしばしば見られるアラブ人名の誤用は、本人名と父親名が取り違えて使われることです。そして、このような間違いは王族や首長一族の名前が引用される際にとくに多いようです。

(例)

人物名	正しい呼び方	誤用
Saud Al-Faisal(サウディアラビア外相)	サウード外相	ファイサル外相
Ali Al-Khalifah(クウェイト元蔵相)	アリ蔵相	カリーフア蔵相
Abdulaziz Bin Salman Bin Abdlaziz (サウディアラビア石油省次官)	アブドルアジーズ殿下	サルマーン殿下

このような間違いは、本人名に続けて父親名と一緒に使われたときに、父名をあたかもラスト・ネームであるかのように考えてしまうことから来る単純なミスなのでしょう。しかし、こういう間違いはしばしば無用の混乱を引き起こすばかりでなく、ご本人達への無礼にも当たりますので、日頃から十分に気をつけておく必要があります。とくに、たとえば上の例のアブドゥルアジーズ次官殿下のような場合は父君のサルマーン殿下(HRH Prince Salman Bin Abdulaziz Al-Saud)が現職のリヤド州知事であるだけに、両者の混同は単なるミスだけではすまされぬことにもなりかねませんので、極めて要注意といえます。

因みに、イラクのフセイン(Saddam Hussain)大統領の場合は「サッダーム大統領」が正しく、「フセイン大統領」は父名の誤用です。また、エジプトの故ナセル(Gamal Abdul-Nasser)元大統領の場合は、「ガマル大統領」と本人名で呼ぶべきだったのを父名を使ったところに誤りがあった上に、さらにその父名「アブドゥルナーセル」を勝手に簡略化して「ナセル」と呼んだ、という二重の誤用に当たります。

(3) 誤った短縮、省略

アラブ人名が日本人の間で、本人名と父名の混同と同じくらい頻繁に間違っ使用されるのは“Abd-”で始まる3語の組合せから成る名前の場合です。そしてその誤用の殆どは、上に述べた故ナセル元大統領の父名の場合のように、ただ簡便のために名前を真ん中でちょん切ったり、名前の一部を勝手に省略したりして短縮形を使うことです。

(例)

人物名	正しい呼び方	よくある誤用
Abdulrahman (Abd al-Rahman)	アブドゥルラハマーン	ラハマン、ラーマン
Abdulrazzak (Abd al-Razzak)	アブドゥルラツザーク	ラザク、ラザーク
Abdulkareem (Abd al-Kareem)	アブドゥルカリーム	カリーム、アブドラカリーム

既に述べたように、3語から成るアラブ名はイスラームに密接に結びついている名前であり、それを勝手に切り離し、アッラーの神を意味する「ラハマーン」、「ラツザーク」、「カリーム」等々だけを使うのは、それらの名前を持つ人々を、「アッラーさん」と呼ぶことと同じこととなります。これは当のご本人たちに失礼である以前に、イスラームの社会では神に対する冒瀆とすらいえる行為であり、アラブの人々と深くつき合っていこうとする者にとって決して犯してはならない過ちというべきでしょう。

(4) 誤った発音、表記

アラブ名そのものの誤用というわけではありませんが、名前に関する誤りでしばしば見聞きされる

のは発音上の間違いとそれに基づく誤った表記です。

アメリカの消費者運動家として広く知られるラルフ・ネイダー(Ralph Nader)という人がいますが、この人物はレバノン人移民を父祖に持つ米国人で、名前の方もアメリカナイズされてしまっていますから、“Nader”は「ネイダー」で当然よいのですが、これがクウェイト石油公社(KPC)の Nader H. Sultan 副総裁の場合となると“Nader”は「ネイダー」ではなくて、アラブ読み「ナーデル」でなければなりません。

アラブの人たちが名前の呼び方、読み方を非常に気にするのは、アラブの名前やアラビア語を常に誇りに思っているがゆえに、それらが欧米流に発音される事で何だか神経を逆撫でされたかのように感じるからに外なりません。現にサウディアラビアでは1970年代に、アラビア名や地名を外国語で表記する際はできる限り原語の発音に近い表記をするように、との政府指針が出されている程です。こここのところはアラブの流儀に正当な敬意を払い、その国その土地のやり方にできるだけ従うよう努力を心がけることが重要なのではないのでしょうか。

(参考) 称号、敬称の使い方

一般に王皇室のメンバーの名前に冠せられる称号である“His/Her Royal Highness”(HRH)、“His/Her Highness”(HH)や、通常は、国王、皇帝に専用される“His/Her Majesty”(HM)、中東アラブ・イスラーム地域に固有の称号“Shaikh”“Sultan”などについては、どの湾岸アラブ国においてもその用法が明確に定められています。従って、これらについては日頃から十分に注意を払い、軽率な誤用や無礼のないように気を配っていただければなりません。

(1) “HRH”と“HH”

サウディアラビアにおいて“His/Her Royal Highness”の称号(“HRH”あるいは“H.R.H.”と略して使われる)を冠することが許されるのは、サウード王家の中でも、アブドルアジーズ初代国王(イブン・サウード王)の直系の子孫…ファハド国王のすべての兄弟姉妹とその次世代の直系の王子王女達…に限られます。この範疇に入るのは、アブダッラー皇太子兼第1副首相、スルターン第2副首相兼国防航空相、ナーフ内相、サウード外相、ムハンマド東部州知事、アブドルアジーズ石油省次官、それに世界的な実業家として知られるアル・ワリード・ビン・タラール王子などなど、多数です。

これに対してイブン・サウード王の9人の兄弟一統の子女、その他サウード王家傍系一族の王子王女達には“His/Her Highness”(“HH”あるいは“H.H.”)が使われます。たとえばサウディアラビ

ア総合投資院(SAGIA)総裁のアブダッラー ビン・ファイサル ビン・トルキー殿下、国防航空省次官で1997年の京都環境会議にサウディアラビア王国の公式代表団を率いて出席したファハド ビン・アブダッラー王子などがそうです。

サウディアラビアのファハド国王に対しては“Custodian of the Two Holy Mosques, King”(「二聖モスクの守護者であり、国王」の意)が冠せられることが広く知られています。この場合、“H.R.H”は使われません。一般に国王、皇帝に対して使われる称号である“His Majesty”(“HM”)は、サウディアラビアでは故カーリド前国王の代までは使われていましたが、ファハド国王の代になって廃止されました。現在中東アラブ地域の国の国家元首で、“HM”)が冠せられているのは、オマーンのカブース国王(HM Sultan Qaboos Bin Said)とヨルダンのアブダッラー国王(HM King Abdullah Ibn Hussain Ibn Talal Ibn Abdullah Al-Hashimy)の2人だけです。

クウェイトでは首長と皇太子のみが“His Highness”(“H.H”)を冠することとされ、その他の首長家一族には“Shaikh”(男性)、“Shaikha”(女性)が称号として使われます。しかしアラブ首長国連邦(UAE)においては、7つの首長国の各首長一家全員に対し、男女長幼を問わず、“HH”が使われることになっています。この点はバハレイン、カタールでも同様です。

(2)“Amir”(アミール)

サウディアラビアにおいては、サウード王家一統の王子は直系傍系を問わずすべて“Amir”(「アミール」、アラビア語で“Prince”の意)と呼ばれます。王女、妃殿下の場合には“Amira”(「アミーラ」)となります。またサウディアラビアの地方自治体の長の官職名としても、州知事のことを“Amir”と呼んでいます。

(例)

Amir Salman Bin Abdulaziz	サルマーン ビン・アブドルアジーズ殿下
Amir of the Eastern Province	東部州知事
Amira Noof Bint Khalid	ヌーフ ビント・カーリド王女

一方クウェイトでは「アミール」はただひとり、クウェイト首長のことであり、その他の意味を体して使われることはありません。UAEの7つの首長国、およびカタール、バハレインのいずれにおいても、クウェイトにおけると同様に、首長以外が「アミール」と呼ばれることはありません。

(3)“Shaikh”(シェイク)

既に述べたように、クウェイトの場合は“Shaikh”(「シェイク」、男性)、“Shaikha”(「シェイハ」または「シェイカ」、女性)は首長一族であるサバーハ家のメンバーにのみ許される称号です。但し、サ

バーハ家の一員であれば誰でも「シェイク」「シェイハ」と呼ばれるわけではなく、社会的に認められた公的地位に就いているか、あるいはそのほか然るべく世間に認知されている者だけがそのように呼ばれる、という暗黙のルールが存在するようです。

しかし、カタール、バハレインやUAEの7つの首長国については、それぞれの首長一族全員にこれらの称号が使われる外、UAE、オマーンでは国内の有力部族の長に対しても「シェイク」を冠するのが習いとなっているようです。

サウディアラビアにおいては、公式には「シェイク」の称号の使用には明確な制限があります。即ち、1988年に出された第1副首相通達によって、「シェイク」のタイトルは宗教指導者、イスラーム法学者、シャリーア法廷判事などにのみ使用が許されることとなっています。この通達が出される以前は、各省庁次官、次官補級にあてて出状される公式文書の宛名に「シェイク」を冠することが頻繁に行われていましたが、この通達後はそれが許されなくなりました。

(4) “HE”

クウェイト、UAE、バハレイン、カタール、あるいはオマーンでは、“His/Her Excellency” (HE、または“H.E.”)の称号は閣僚、省庁に準ずる政府機関の長、および大使級の外交官にのみ使用されず。但し、UAEの場合、各首長家出身の閣僚については“HH”がそのまま冠されるのが通常です。

一方、サウディアラビアにおいては、すべての官公庁の次官補クラス以上の人々に対して“HE”が使われます。但し、王族の閣僚、官僚には“HE”ではなく、王族を表す称号が冠されます。また外交官についても、大使にはもちろんのこと、公使に対しても、“HE”を冠する例がしばしば見られません。

ついでながら、“His/Her Excellency”を冠すべき人物に宛てた公式文書の正しい宛書の書式について述べておきましょう。『米国国務省・外交慣例指針』によりますと、文書の宛先の人物が何らかの公式称号…たとえば博士、教授、聖職者などの号…を持っている場合には、“HE”のすぐ次にそのタイトルを付して宛書し、公式称号がない場合は“Mr.”、“Mrs.”、“Miss”などの一般敬称をつけないで“HE”のみを冠するのが正しいとされます。但し、相手方がたとえば王皇族であるというように、“HE”で対応すべき地位よりも高位の身分にある人物の場合には“HE”を使わず、本来の称号が冠せられます。

以下に、同上『指針』による「“HE”の正しい使い方」の例をいくつかあげておきましょう。

“HE”の正しい使い方

HE Shaikh Salim Al-Sabah Al-Salim Al-Sabah

Deputy Prime Minister cum Minister of Defense(元クウェイト副首相兼国防相)

HE Dr. Khalid Bin Muhammad Al-Angari

Minister of Higher Education (サウディアラビア高等教育相)

HE Fawzi Abdulmajeed Shobokshi

Ambassador of the Kingdom of Saudi Arabia(元駐日サウディアラビア大使)

“HE”と一般敬称を併用する例

HE Mme. Mervatt Tallawy

Ambassador of the Arab Republic of Egypt (元駐日エジプト大使)

“HE”を使用しない例

HRH Prince Naif Bin Abdulaziz Al-Saud

Minister of Interior (サウディアラビア内相)

HH Shaikh Faisal Bin Khalid Muhammad Al-Qasimi

Minister of Youth and Sports (アラブ首長国連邦青年スポーツ相)